



トンガレポート <19>

2018/9/14

青年海外協力隊 シニアボランティア
2016年度 2次隊 卓球隊員 西岡 昌彦

2年間の活動任期も残りわずかとなりました。トンガレポートもこれで最終回となります。最後は今年4月から取り組んだ新たな活動について紹介します。

2018年4月から ITTF(国際卓球連盟) Oceania の支援により Smash Down Barrires Program(障がい者向けプログラム)のトンガ人担当者が卓球協会に採用されました。毎度のことですが、トンガでは事前の情報が何もないうまま、ある日突然こういったことが起きます。

以降、私は主練習場でのナショナルチームとその候補生への練習とは別枠で、担当者と施設訪問やイベントに参加。専門分野の「卓球」とは程遠い世界でしたが活動中はすべての参加者を笑顔にすることができ、現場で「私はいま相手の役に立っている」ということを実感できる最もボランティアらしい貴重な経験を得ました。以下、新規活動の様子を画像を中心にしてお伝えします。

A、施設訪問

① トンガ赤十字センター



開脚した脚の内側でボールを行き来させるゲームをしています。操作性をよくするために大きなボールを使用しました。相手を代えながら子供たちは熱中していましたが私は途中で腰が痛くなり残念ながら20分でリタイアしました。

② ンゲレイア 小学校(特別支援学級)



👉 先生・生徒とともにボールころがし

👉 風船のやり取り ①

この小学校ではいろいろなことをして生徒と遊びました。上の画像2枚、左端の先生が毎回私たちの活動を積極的に支援していただき大変助かりました。



👉 風船のやり取り ②



👉 生徒と一緒に

③ 国立バイオラ病院



👉 簡易テーブルでボールころがし



👉 病棟の皆さんと一緒に

週に1回、1時間の訪問。単純な遊びから「ほぼ卓球」に近いものまで相手の様子を見ながら内容を工夫。中には私とフォアハンドを50回以上続けた患者さんもおり、本人はもちろん、職員や医師の方々からも喜ばれました。

④ アロンガセンター



👉 大人気の的当てゲーム



👉 毎回、大人も子供も大はしゃぎ

この施設には週に2回、1回につき2時間活動しました。ここでもいろいろな遊びをしましたが中でもプラスチックコップを的にしたボール当てゲームが子供から大人まで全員に大人気でした。内容は卓球とは程遠く、もはや「緑日の射的」のような状況ですが、全員真剣な目つきでプレー。特に動作に制限のある方たちがこのプログラムに積極的に参加してくれたことが印象的でした。



👉 入居者の皆さんと一緒に



👉 シットティングバレーにも参加

コップの的当てゲームは2人1組のチーム戦を試したところ大いに盛り上がりました。左上の画像は優勝した2人が賞品の Tシャツを手にして喜んでいるところですが、残念ながらシャツのサイズが合わず、他の入居者に渡していました。この施設では、他のボランティアと協力して「ボッチャ」や「シットティングバレー(上右画像)」なども楽しみました。

B、イベント参加(不定期)

2018年4月以降、市内各所で行われるイベントに参加。そのほとんどは屋外で行われ、台を使用しない場合も多々ありました。子供から大人まで幅広い年齢層の市民に「卓球の道具を用いた遊び」を親しんでもらいました。その一部を紹介します。

① 障がい児を持つ母の会 (2018/4/6)



👉 ボールのバランスを取る練習



👉 ボールの受け渡しに挑戦、上手でした

② Preschool annual sports day (2018/7/26)



👉 幼稚園児とバランスの練習、ちょっと難しかったかな

③ Agricultural Show (2018/7/27～18)



👉 農業祭では会場に卓球台を設置
「芝生の上に卓球台」珍しい光景です

<新規活動を振り返り>

今回皆様に紹介した活動の画像に卓球台・ネット・ラケット・ボールなどの卓球用具は写っていますが、内容は「卓球」でないとお判りいただけるかと思います。私はトンガに「卓球の指導者」として着任。それなりに自信とプライドもありますが、敢えてそのプライドを捨てて「卓球」でも「ピンポン」でもない世界に飛び込んで行ってよかったと思っています。特に動きに制限がある方々を楽しませる知識を得たことが私にとって大きな財産となりました。

こうした経験を得ることができたのも障がい者プログラムの担当者の存在だと思っています。時間管理が大変ゆるいトンガにおいて、彼は私と出会ってから今日まで一度も時間に遅れることがありませんでした。他人の面倒見も大変よく子供たちからも慕われています。そんな彼の姿を見て私は自分の空き時間を彼の支援に使いました。

彼は元テニスの選手で卓球の知識はないため、時間ができた時は自ら私に技術指導を求める積極ぶりで、私も喜んで協力しました。私たちはお互いに協力しながらプログラム参加者を笑顔にすることができたトンガで最強のチームだと思っています。できればもっと早く出会いたかったし、あと少しでトンガを去らなければいけないのが大変心残りです。



障がい者プログラム担当者(左端)

・おわりに

トンガでの2年は生活面、活動面ともに思っていたより苦戦しましたが、それは自分の能力や経験値が足りなかったからだと反省しています。しかし多くの方に助けていただきながら最後までたどり着いたことによりこの2年で得たものは大変大きく幸せに思っています。

私にはトンガレポートという情報発信の場があり、それを継続できたことも幸運でした。レポートに目を通していただいた方々、日本から感想や応援のメッセージをいただいた方々、アップロードにご協力いただいた県庁担当者の方々、全ての皆様にあらためて感謝し、お礼申し上げます。

そして最後、この国に対しては以下3つの言葉で締めくくらせていただきます。

さようなら



ありがとう



トンガ

